

参 考 资 料

日本遺産のストーリー

“日本最大の海賊”の本拠地：芸予諸島—よみがえる村上海賊“Murakami KAIZOKU”の記憶—

■瀬戸内海航路を掌握した「村上海賊」

1586年、堺を出港し、瀬戸内海を西へ航海していた宣教師ルイス・フロイスは、芸予諸島のあ
る島に近づいた時のことを次のように記している。「その島には日本最大の海賊が住んでおり、
そこに大きい城を構え、多数の部下や地所や船舶を有し」、「強大な勢力を有していた」（『完
訳フロイス日本史』）、と。フロイスをして「日本最大」と言わしめた海賊。それが「村上海
賊」である。

瀬戸内海を東西に分断するかのよう、島々が南北に密集して連なる「芸予諸島」。一見、穏
やかに見える海況だが、狭い海峡（瀬戸）にいざ船を進めると、大潮時には高低差3m以上にも
なる潮の満ち干きや、最大10ノット（時速約18 km）の潮流が容赦なく襲う。古来より航海者を
悩ませてきた海の難所である。「船に乗るより潮に乗れ」。この地域に古くから受け継がれる漁
師たちの言葉がそれを物語る。

村上海賊は、このような芸予諸島の因島（広島県尾道
市）、能島（愛媛県今治市）、来島（同）に本拠をおいた
三家からなる。同じ村上姓を名乗る三家は強い同族意識を
持ち、それぞれの領内に多くの「海城」を築いた。フロイ
スが見た「大きい城」は、これらの海城である。

因島村上氏は余崎城、美可崎城、長崎城、青木城な
ど、沿岸部に海城を築き、安芸・備後国の陸地部に沿った
航路（安芸地乗り）を押さえた。能島村上氏は能島城を中
心に芸予諸島の中央を通過する最短航路（沖乗り）を、来
島村上氏は来島城を中心に四国側の航路（伊予地乗り）を押さえ、三家が連携をして芸予諸島の
全城を掌握した。

多くの海城の岩礁には、高低差のある潮の満ち引きに影響されず、いつでも船が係留できるよ
うに、陸から海に向かって柱が立ち並んでいた。また海岸部を埋め立てて平坦面を造成し、荷揚
げや海産物の加工場、造船や修理場に利用されていた。海城には海賊たちが住み込み、海戦に備
える一方で、そこを拠点として多様な海上活動に従事したのである。さらに能島城や来島城など
は、その対岸に「水場」と呼ばれる海城に水や物資を供給する場を持ち、その一帯を城下町とし
て生活の本拠としていた。航路に面した前線の活動基地である「海城」と、その対岸にある集落
が一体となって、村上海賊の本拠地が形成された。南北に連なる芸予諸島の地の利を最大限に活
かし、「海城」を航路の要衝に配置することで「海の関所」とし、瀬戸内海の東西交通を支配し
たのである。

■全盛期における村上海賊の海上活動

一般に「海賊」と聞いて思い浮かぶのは、理不尽に船を襲い金品を奪う無法者の姿。いわゆる
「パイレーツ」であろう。しかし村上海賊の海上活動の実態を正しく紐解けば、決して悪者では



村上海賊の海城・能島城と周囲の潮流

撮影者：添畑薫氏

なく、むしろ瀬戸内海交通の秩序を支える上で不可欠な存在であったことがわかる。

村上海賊が歴史上に姿を現したのは南北朝時代である。1349年には「野嶋」（能島村上氏）の名が見られ、東寺領の荘園であった弓削島に入る幕府の船を警固する役割を持った勢力として登場した。この頃には海上の小勢力の一つに過ぎなかったが、やがて因島村上氏が遣明船の警固を守護大名から命じられるなど、村上三家は陸の勢力との結束を固め、芸予諸島を本拠に瀬戸内海の主要な航路や港を掌握する一大勢力へと成長した。

戦国時代、村上海賊が活躍した海戦は枚挙に暇がないが、その代表的な海戦として、村上三家が連携をして織田信長方の船団に勝利をおさめた第一次木津川口合戦がある。中国地方の大名・毛利輝元は、室町幕府最後の将軍・足利義昭の命を受けて、信長と対峙する石山本願寺へ兵糧を運び込もうとする。毛利軍の主力であった村上海賊は、海の難所で培われた巧みな操船技術で敵を取り囲み、「ほうろく火矢」という火薬を用いた武器を用いて信長方を撃破し、無事に兵糧を運び入れることに成功した。この合戦で海賊の力を知った信長や羽柴秀吉は、海賊を味方につけ瀬戸内海の制海権を握るべく、懐柔作戦を展開する。村上海賊の存在は、天下人や陸の大名の動向をも左右したのである。

一方、平時には芸予諸島の海城を拠点に様々な海上活動を展開した。その一つが「海の安全保障」である。芸予諸島に近づいたフロイス一行は、海賊に襲われる危険を回避し、航海の安全をはかるため、「署名」によって瀬戸内海を自由に通行できるよう、村上海賊に好意ある寛大な処遇を求めた。すると村上海賊は、「怪しい船に出会った時にみせるがよい」（『完訳フロイス日本史』）と言い、紋章が入った絹の旗と署名を渡した。フロイスらが手にしたこの旗が後に「過所船旗」と呼ばれる通行許可証である。村上海賊はこの旗を配布し、あるいは海賊を船に乗せて水先案内を行うことで、津々浦々に潜む他の海賊や航路の難所から船を守り、その対価として通行料を徴収した。海の難所であるからこそ、この掟は重視され、大名や商人の船はこれに従うことで航海の安全が保障されたのである。この通行料を徴収する海の関所を「札浦」と言うが、芸予諸島を基点として、全盛期には九州北部から畿内における航路の要港に「札浦」が設けられるほどに勢力を拡大した。

また、海の安全保障者のほかに「商人」の顔も垣間見ることができる。能島城の目と鼻の先にある見近島は、商品である中国産の貿易陶磁器や備前焼を一時的に保管する物流の基地であった。村上海賊が物資流通に関与することにより、その本拠地である芸予諸島には国内外の高級な品々や優雅な文化がもたらされたのである。

■村上海賊の生活・文化

とかく猛々しいイメージで語られる海賊であるが、大名と同じように、優雅に茶や香をたしなむ「文化人」でもあった。また高い文学の教養を持っており、それを知るものとして、大山祇神社（今治市大三島）に奉納された「法楽連歌」がある。神の島と呼ばれる大三島に鎮座する大山祇神社は、その歴史は古代にさかのぼり、日本総鎮守、伊予国の一宮とされ、武功や海上交通の安全を守る神として海賊たちの信仰を集めた。このような由緒のある神社で、村上海賊の武将たちは自らの思いを詠み連ね、それを奉納することで武運を祈願したのである。因島では、武運を祈り、戦勝を祝って踊ったとされる「椋浦の法楽踊り」が現代に伝わっている。

さらに村上海賊には「漁業者」としての顔もあった。瀬戸内海の新鮮な魚介類を獲り、時に

は、それをお歳暮として陸の大名に送り届けた。芸予諸島で食される海鮮料理「法楽焼」や「水軍鍋」は、村上海賊時代から伝わる郷土料理とされており、豪快に盛られた海の幸に、海賊たちの食文化を垣間見ることができる。

このように、村上海賊が築いた海城群、海賊たちが崇めた寺社、伝統を受け継ぐ海の文化は、現在もこの地域に色濃く残っている。尾道・今治をつなぐ現在の芸予諸島をゆけば、瀬戸内海随一の美しい多島海とともに、中世の瀬戸内海航路を支配し、“日本最大の海賊”と称された村上海賊の記憶をたどることができる。

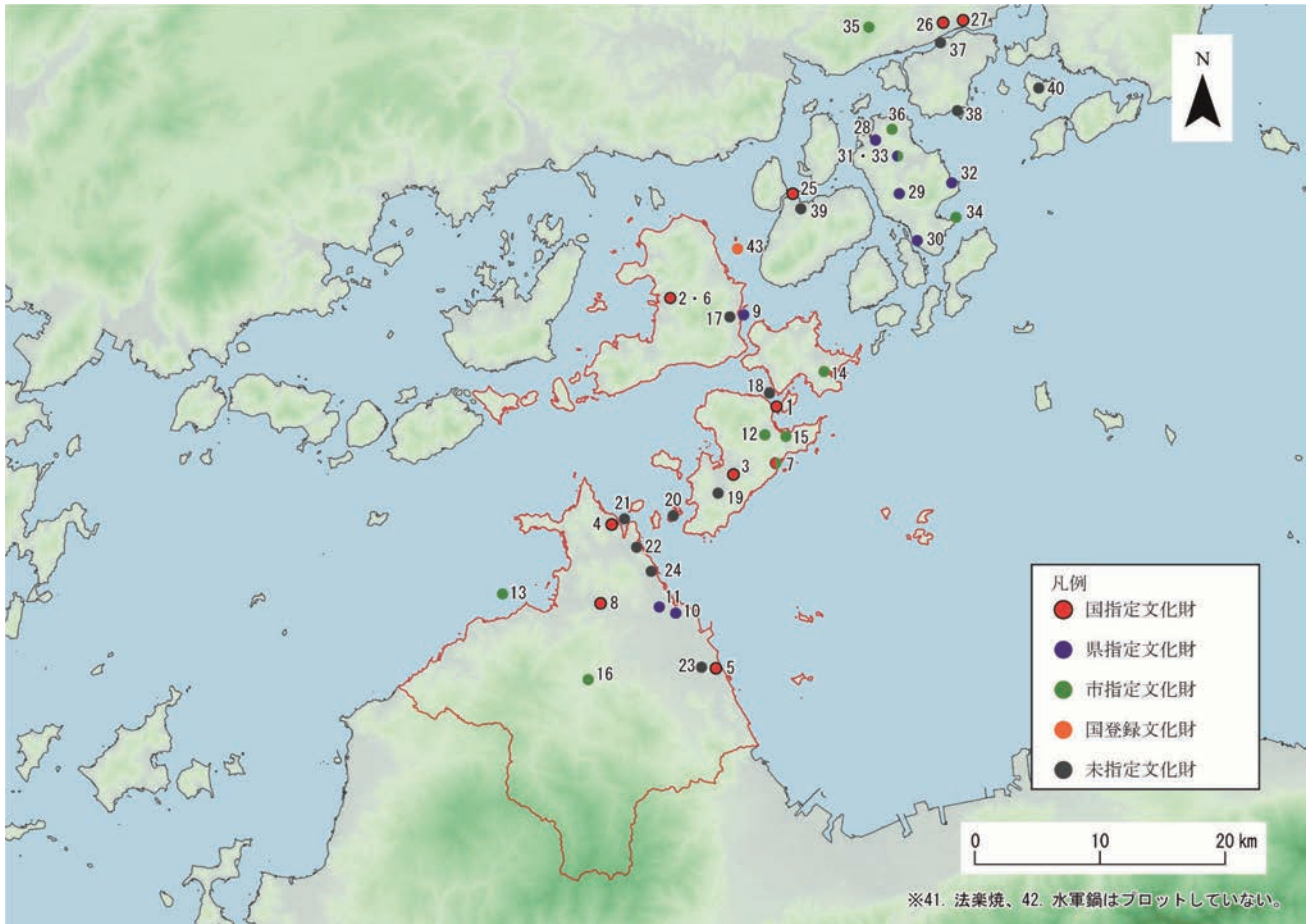
構成文化財一覧

No.	指定等の状況	名称	所在地
1	国史跡	能島城跡	今治市
2	国名勝	大三島	今治市
3		八幡山	今治市
4		波止浜	今治市
5		志島ヶ原	今治市
6-1	国宝・国重文・ 国天然記念物	大山祇神社の文化財	今治市
6-2	国重文（典籍）	大山祇神社法楽連歌	今治市
7	国重文(石造美術)・ 市有形	友浦善福寺宝篋印塔および周辺の中世文化財	今治市
8	国重文（石造美術）	乃万地区の石塔群	今治市
9	県史跡	甘崎城跡	今治市
10		今治城跡	今治市
11	県有形	別宮大山祇神社拝殿	今治市
12	市史跡	幸賀屋敷跡および周辺の村上海賊関連遺跡群	今治市
13		怪島城跡	今治市
14	市天然記念物	伝村上雅房墓と禅興寺	今治市
15	市有形含む	能島村上家伝来資料群	今治市
16	市有形	光林寺文書	今治市
17	未指定	伝村上吉継墓と明光寺	今治市
18		見近島	今治市
19		伝村上義弘墓と高龍寺	今治市
20		武志（務司）城跡と中渡（中渡）城跡	今治市
21		来島城跡	今治市
22		大濱八幡大神社	今治市
23		国分山城跡	今治市
24		小湊城跡と城慶寺	今治市

No.	指定等の状況	名称	所在地
25	国宝	向上寺三重塔	尾道市
26	国重文	光明寺の浪分観音	尾道市
27		浄土寺宝篋印塔	尾道市
28	県史跡	青木城跡	尾道市
29		青陰城跡	尾道市
30		長崎城跡	尾道市
31	県重文・市重文	因島村上家伝来資料群	尾道市
32	県無形民俗	椋浦の法楽おどり	尾道市
33	市史跡	因島村上氏一族の墓地	尾道市
34		地藏鼻（鼻の地藏）、美可崎城跡	尾道市
35		鳴滝山城跡	尾道市
36	市名勝	白滝山（五百羅漢像）	尾道市
37	未指定	岡島城跡	尾道市
38		余崎城跡	尾道市
39		俵崎城跡	尾道市
40		百島茶臼山城跡	尾道市
41		法楽焼	今治市・尾道市
42		水軍鍋	今治市・尾道市
43	国登録記念物 （名勝地）	瓢箪島	今治市・尾道市



構成文化財位置図



参 考 文 献

- 宮窪町（1994）『宮窪町誌』
- 今治市（2009）『今治市景観マスタープラン』
- 今治市（2009）『今治市都市計画マスタープラン』
- 今治市（2009）『今治市観光振興計画』
- 今治市（2009）『今治市緑の基本計画』
- 今治市（2012）『今治市景観計画』
- 今治市（2016）『第2次今治市総合計画 2016-2025』
- 今治市（2018）『第2次今治市総合計画実施計画 2018-2020』
- 今治市（2019）『第二次今治市環境基本計画』
- 今治市（2019）『今治市の統計』
- 愛媛県教育委員会（2019）『えひめ文化財防災マニュアル 2018』
- 今治市教育委員会（2006）『今治市埋蔵文化財調査報告書第82集 史跡能島城跡－平成15・16年度岩礁ピット調査報告書－』
- 今治市教育委員会（2007）『今治市埋蔵文化財調査報告書第85集 史跡能島城跡－平成17年度船だまり調査報告書－』
- 今治市教育委員会（2008）『今治市埋蔵文化財調査報告書第90集 史跡能島城跡－平成18年度能島東部海岸調査報告書－』
- 今治市教育委員会（2009）『今治市埋蔵文化財調査報告書第98集 史跡能島城跡－平成19年度郭Ⅰ・南部平坦地調査報告書－』
- 今治市教育委員会（2010）『今治市埋蔵文化財調査報告書第103集 史跡能島城跡－平成20年度郭Ⅱ・郭Ⅲ・南部平坦地調査報告書－』
- 今治市教育委員会（2011）『今治市埋蔵文化財調査報告書第108集 史跡能島城跡－平成21・22年度郭Ⅰ・郭Ⅳ・郭Ⅴ・南部平坦地下海岸調査報告書－』
- 今治市教育委員会（2012）『今治市埋蔵文化財調査報告書第112集 史跡能島城跡－平成22・23年度郭Ⅲ（第2・3次）調査報告書－』
- 今治市教育委員会（2013）『今治市埋蔵文化財調査報告書第119集 史跡能島城跡－平成22・23年度郭Ⅱ（第2・3次）調査報告書－』
- 今治市教育委員会（2014）『今治市埋蔵文化財調査報告書第125集 史跡能島城跡－平成23・24年度郭Ⅵ調査報告書－』
- 今治市教育委員会（2015）『今治市埋蔵文化財調査報告書第130集 史跡能島城跡－平成25年度城内通路調査報告書－』
- 今治市教育委員会（2017）『今治市埋蔵文化財調査報告書第139集 史跡能島城跡－平成27年度城内通路（第2次）調査報告書－』
- 今治市教育委員会（2019）『今治市埋蔵文化財調査報告書第146集 史跡能島城跡－平成15～27年度 整備に伴う調査総括報告書－』
- 文化庁文化財部記念物課監修（2005）『史跡等整備のてびき Ⅰ～Ⅳ』

- 文化庁文化財部記念物課（2015）『史跡等・重要文化的景観マネジメント支援事業報告書』
- 文化庁文化財部記念物課（2019）『文化財保護法に基づく文化財保存活用大綱・文化財保存活用地域計画・保存活用計画の策定に関する指針』
- 上田三平（1943）「水軍城郭の遺構としての能島城趾」『考古学雑誌』33-9
- 鵜久森経峰（1939）『伊予水軍と能島城趾』能島史蹟保勝会
- 柴田圭子（2002）『しまなみ水軍浪漫のみち文化財調査報告書－埋蔵文化財編－』愛媛県教育委員会
- 伊予史談会編（1982）『予章記・水里玄義』伊予史談会叢書5、伊予史談会
- 柴田圭子（2001）「16世紀中葉の輸入陶磁器の再評価－中国・四国地方の遺跡を中心に－」中世土器研究会編『中世土器研究論集－中世土器研究会20周年記念論集－』中世土器研究会1、三弥井書店
- 松田毅一・川崎桃太訳『フロイス日本史』5、五畿内篇Ⅲ、中央公論社
- 山内譲（1992）「中世瀬戸内海の海城」『四国中世史研究』2
- 山内譲（1998）『中世瀬戸内海地域史の研究』法政大学出版局（初出〔山内1992〕）
- 山内譲（2016）「解題Ⅱ『予章記』の成立」佐伯真一・山内譲校注2016『予章記』伝承文学注釈叢書
- 山内譲（2018）『海賊の日本史』講談社現代新書

史跡能島城跡保存活用計画

発行日：令和2年(2020)3月

編集・発行：今治市教育委員会

〒794-0027

愛媛県今治市南大門町二丁目5番地1

TEL (0898) 32-5200 (代)

印刷：株式会社 原田印刷社

